朝日教育会議
Asahi Education Forum

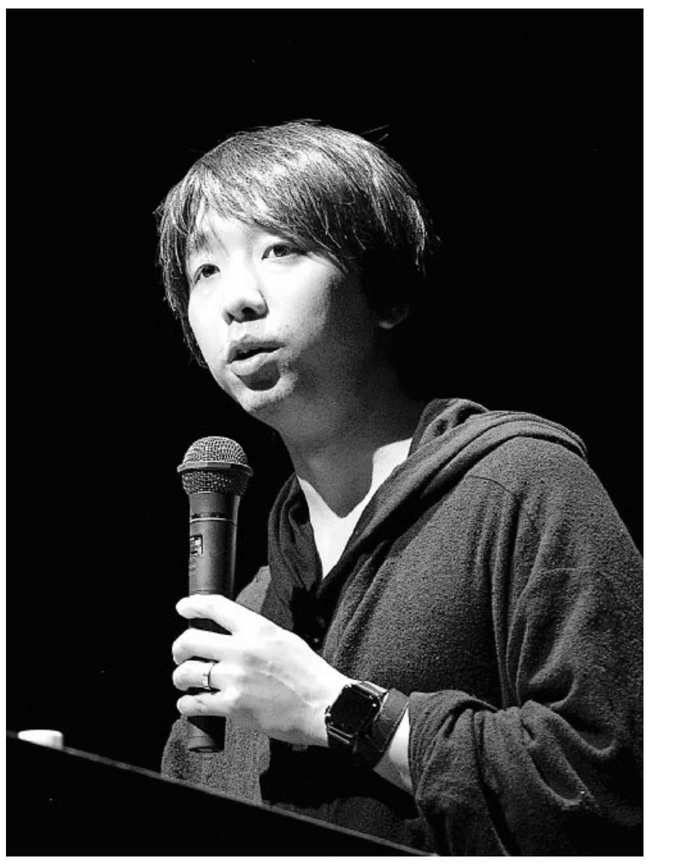
公立大学法人大阪×朝日新聞

# 大阪に新大学　描く未来は

万博開催を控える大阪に2022年、大阪府立大学と大阪市立大学の統合による新しい大学づくりが進んでいる。人工知能（AI）の発達・グローバル化が進む時代、大阪に求められる新しい大学の役割とは何か。新大学実現に向け準備を進める公立大学法人大阪が「朝日教育会議2019」を企画し、「知と心がワクワクする大学～大阪に求められる未来志向型大学とは～」と題して議論した。
【大阪市中央区の大阪ビジネスパーク円形ホールで9月27日に開催】

## 基調講演

筑波大准教授・ピクシーダストテクノロジーズ代表取締役
落合陽一さん



おちあい・よういち　1987年生まれ。計算機が自然にあふれ、一体となった自然観であるデジタルネイチャーと呼ばれるビジョンに基づき実世界ユーザーインターフェースの研究に従事。2015年に筑波大に着任、17年より准教授。ベンチャー企業のピクシーダストテクノロジーズ代表取締役も務める。

## 人を支える技術研究　とにかく試みる

今取り組んでいることの一つが、社会的な公益性の高い課題だ。例えば高齢化に伴う体の問題や視聴覚の問題を、コンピューターを使ってどう補助していくのか。テクノロジーとダイバーシティーを結びつける取り組みだ。今日はこの話を中心に進めたい。

社会は今後、高齢化で多様化していく。目が見えない人、耳が聞こえない人、物忘れが激しい人、体全体が動かない人……。

昔、困った人間を支えたのは人間だった。しかし今後は人口が減少して若い人の数も減る。私はあるときから、未来の社会について「コンピューターを使って人間を支えるしかないのでは」と考えている。

人口増加社会だった高度成長期と逆で、私たちが今やっていることは撤退戦だ。しかし撤退戦で付加価値が生み出せないわけではない。ハード面では衰退しても、ソフト面はまだまだ可能性がある。

例えば電動車いす。イノベーションが起きているわけではなく価格もそろっている。しかしソフトウェアについては、何を認識してどう動かせばより良いのかということなどについてまだ考えうる。そのための技術もある。

同じものでも違う価値観を生む実験を繰り返す作業は、いわば「発酵」だ。作物を収穫して放置したら発酵するが、付加価値が高いものはたくさんある。日本酒、チーズ、納豆……。今ある何らかのデジタル技術が発酵すれば、モノを変えることができるかもしれない。それを私は「デジタル発酵」と言いたい。

「ダイバーシティー」のマーケットの規模はわからない。私は今のうちに様々な実験をしなければならないと考えている。この分野でイノベーションを起こすには、おそらく公的資金を通じるなどして大学などでやらなければならない。先の見通しはよくわからないけど、とにかくすべて試みる。「謎のデバイスがあるけど、学生さん使ってみて」といった形で。もしかしたら「ありえない」着地点があるかもしれない。大学はそんな場所だと思う。

実は、こういう技術研究をやっている方は世の中にたくさんいる。しかし彼らを大学の教員にするのはとても難しい。現状の大学は、論文の本数や賞の授与、ポストの空きなどパラメーターが多過ぎる。

彼らを巻き込みながら問題を解いていくことが大学にとっても必要だ。新しい評価の方法を考えないと、新しい問題を解決する新しい人材はなかなか大学に入ってこないだろう。大学がそれで良いわけがない。新しい価値の基準を設計していかない限り、新しい価値が大学から生まれることはなくなる。非常に危惧される状況だ。

私の尊敬する人物の中に、エジソンと千利休がいる。発明によって経済を回すことは大切だし、美学を完成させることもとても大切だと思うからだ。Aに価値があるし、Bにも価値がある。そんな中で大学の教員たちの間では「基礎研究にお金を」という意見と「応用研究が大事だ」という意見の応酬がある。どちらも大切に決まっている。経済を回すのも大切だし、哲学を深めるのも大切。文化をより醸成させていくのも大切。それと同じだ。

我々の社会は、今後も掘り込める面白い要素がある。新しい大学ができるなら、その大学は未来のことをどれだけ考えられるかということが重要だ。未来を考えられる大学であって欲しいと思う。

## パネルディスカッション

基調講演に続き、「大阪に求められる未来志向型大学とは」と題してパネルディスカッションを行った。「陰山メソッド」で知られる教育者の陰山英男さん、大阪を拠点にICTシステム設計・開発などを手がける企業家の生駒京子さん、講演に続いて参加の落合さんが、「新しい大学」への期待を率直に語った。（ファシリテーターは一色清・朝日新聞社教育コーディネーター）

◇

――まだ存在しない「未来の大学」について自由に語り合いたい。今、私たちの社会は大きな変化の時代を迎えている。こうした時代に求められる「新しい大学」像とはどういうものだろうか。

**落合**　アカデミズムに大事なのは多様な価値観を愛することだと私は考えているのだが、実態は必ずしもそうなっていない。このような現状を残念に思う。特に大学院の博士課程は論文の出版数と引用数が重視される。研究者は准教授や教授になるまでは厳しい競争を強いられ、燃え尽きる人も多い。のんびりやっている人のほうが実は面白いことをやっていたりする。論文も、社会にインパクトを与える具体的な活動も、目立たない地味な研究も等しく大切。それぞれの価値を認め合ってこそ意味があるはず。そうした大学は意外に少ないので、新しい大学には「多様な価値観」を期待したい。

### 陰山さん　実社会との壁がないように

**陰山**　実社会との間に壁をつくらない大学が望ましい。私が教員時代に実践して効果を実感した取り組みに「早寝早起き朝ごはん」がある。規則正しい生活習慣の普及活動だ。ところが、ある大学の先生に「朝ごはんを食べたから子どもの成績が良くなった、とは言い切れないのでは」と言われた。厳密に見ると確かにそうなのかもしれないが、朝ご飯を多くの子どもに食べさせる活動はたくさんの学校現場や地域の人たちに共感され広まっている。新しい大学は、社会を良い方向に持って行ける、人々を勇気づけていける大学であって欲しい。

陰山英男さん
一般財団法人
基礎力財団理事長

かげやま・ひでお　小学校教師時代から反復学習や規則正しい生活習慣の定着で基礎学力の向上を目指す「陰山メソッド」を確立。現在は教育クリエイターとして活躍し、全国各地で子供たちの学力向上に成果を上げている。

### 専門性＋情報技術学ぶ時代　生駒さん

**生駒**　自分の役割を担っている人は輝いている。新しい大学は、多様な教員やステークホルダーが役割を持って輝く場であって欲しい。一方、学生は「必殺・学び人」であって欲しい。その上で様々な価値観を持って社会に出てくれることを期待する。産業界や地域も巻き込む「ダイバーシティー　アンド　インクルージョン」ができる大学を期待する。

――最近よく言われる「文理融合」も新しい大学に期待される。

**陰山**　20世紀までのサイエンスは人間の「飛びたい」という欲求から飛行機が生まれ、大量物資を運ぶ必要から船が生まれた。21世紀になるとテクノロジーが進み、社会構造そのものの変化を生み出した。法制度も変えなければならないし、生命倫理に関していえば哲学や倫理の知見がなければ歯止めが利かなくなる。まさに文理融合の時代だ。

**生駒**　幼い子どもがiPadを操作する時代になり、文系理系という言葉自体がもはや不要だ。様々な枠を超えた取り組みが求められているが、根幹にあるのはデジタル・情報技術だろう。文理を問わず、それぞれの専門性に＋αで情報技術を学ぶ時代になっている。新しい大学もそことうまく絡んで欲しい。

生駒京子さん
株式会社プロアシスト
代表取締役社長

いこま・きょうこ　専業主婦を経て1994年、有限会社プロアシスト設立。2001年に株式会社に移行。経済産業省や内閣府などから表彰される。関西経済同友会常任幹事、大阪商工会議所1号議員、大阪大学招聘（しょうへい）教授などを務める。

### 落合さん　多様な価値観　互いに認めて

――大阪という立地条件をどう生かすか、についても考えたい。

**落合**　土地柄や気候は、アカデミックの風土に影響を及ぼす。カリフォルニアにあるスタンフォード大学にいると風が気持ちよくて元気になるし、うつ病の研究で有名なワシントン大学があるシアトルにいると、確かに冬季は気がめいる。大阪で思いつくキーワードは、「商人」「文化」、あるいは「カオス」。大阪の土着性を振り返りながら大学の編成を考えていくと面白いのでは。

**生駒**　関西を全般に盛り上げていくには、社会人教育も重要だと考えている。新大学には、社会人向けのカリキュラムも充実させて欲しい。リタイアした人が学生と一緒に取り組むと良いし、あるいは子どもが大学の授業を受けてもいい。歴史ある大学の統合に付加価値をつけ、関西を元気にし、世界と戦える大学になって欲しい。

**陰山**　「思考力」に主眼を置く学習到達度調査（PISA）で、日本はトップクラスから2003年に10位台に落ちて話題になった。この調査結果は12年にほぼ回復したのだが、なぜか悪いイメージが残っている。それは東大や京大の国際ランキングが落ちているからだ。新大学には、世界から評価される大学になってもらいたい。巨大都市・大阪に世界の評価ランキングの10位に入る大学ができれば、日本の大学そのものが変わっていけるだろう。チャレンジできる基礎体力は持っているはずだ。おおいに期待したい。

## 学生も登壇「日本を盛り上げる」

パネルディスカッションには、大阪市立大学・府立大学の大学院生と学部学生も登壇。新しい大学へのそれぞれの思いを語った。

登壇したのは、大阪市立大学大学院工学研究科・後期博士課程3年の清水克哉さん＝**写真左**＝と、大阪府立大学現代システム科学域4年の森本優子さん＝**同右**。2人とも、大阪・関西万博を盛り上げる学生団体「Honaikude」に参加し、それぞれの大学の学生代表を務める。

清水さんは新しい大学に対し、「大阪から日本を盛り上げる中心的な存在になって欲しい」との思いを披露。大学名を「大阪セントラル大学はどうか」と提案した。「今のカリキュラムを全部見直し、新しく奇抜な教育をどんどんやっていけば良い」と話した。

森本さんは「ゆったりとした大学の空気感が良い。様々な分野の教員がいて、学生との距離も近い」と、今の大学の魅力について語った上で、「大きな大学同士が合併することで、学生がより生き生きと楽しく学べる大学になって欲しい」と話した。

## 「まだない大学」名前にも注目　会議を終えて

今年度の朝日教育会議に参加した14大学のうち唯一、「今はまだない大学」が企画したフォーラムだ。大阪府立大学と大阪市立大学が統合して2022年に新しい大学が誕生する。当然のことながら、求められるのは「未来社会に貢献する」大学だ。

そういう意味では、落合陽一さんのとんがった話は難しかったが、ピッタリだった。未来社会のイメージが浮かび、必要な人材も浮かんできた。新しい大学がどこまでとんがれるか期待して見ていきたいと思った。

ディスカッションで盛り上がったのは新大学名だ。登壇した市立大学大学院生の清水君は「大阪セントラル大学」、府立大学生の森本さんは「大阪公立大学」を提案した。意外に普通だが、東京都立大学が首都大学東京になって評判が悪く東京都立大学に戻ることになったことなども念頭にあったのかもしれない。

一方、落合さんは「筑波大学はかつて東京教育大学だった。茨城県に移るときに茨城教育大学にせずに筑波大学にした人はえらいと思う。東京のエッセンスも何も引き継がなかった」と言い、新大学も「天王寺大学でも夢洲大学でもいいのだけど、大阪のかっこいい地名を引っ張ってくるのも面白い」と続けた。

公立大学法人大阪の幹部も終了後、名前談議で盛り上がっていた。果たしてどうなるのだろうか。

（一色清）

### 朝日教育会議

14の大学・法人と朝日新聞社が協力し、様々な社会的課題について考える連続フォーラムです。「教育の力で未来を切りひらく」をテーマに、来場者や読者と課題を共有し、解決策を模索します。申し込みは特設サイト（http://manabu.asahi.com/aef2019/）から。各会議の日時や会場、講演者などについても特設サイトをご覧下さい。

共催の大学・法人は次の通りです。

神田外語大学、京都女子大学、共立女子大学、慶応義塾大学、公立大学法人大阪、成蹊大学、拓殖大学、千葉工業大学、東京工芸大学、東北医科薬科大学、東洋英和女学院大学、法政大学、明治大学、早稲田大学（50音順）

### 公立大学法人大阪

2022年4月の統合をめざす大阪府立大学と大阪市立大学に加えて、大阪府立大学工業高等専門学校を運営する法人組織。異なる自治体が設置する大学同士の統合は全国初で、8月27日に公表された「新大学基本構想」によると、統合後の学部入学定員は約3千人を想定し、国公立大では大阪大、東京大に次いで3位の規模となる。統合後は両大学で同じ分野を扱う学部を再編して11学部・1学域にする。